
カゲロウデイズ

ソフィア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カゲロウデイズ

【NNコード】

N6135Z

【作者名】

ソフィア

【あらすじ】

じんさん、じづさんの神曲、「カゲロウデイズ」のイナズマイレブンパロです。

お日様園の4TOPメイン。

・・・暑い。

本当に、その一言しか出でこない程暑かつた。

「・・・あつ！」

僕これがいい！スイカアイス！』

僕・・・陽炎レインは、幼馴染と共に、

アイスを買いに来ていた。

勿論、このうざつたい暑さに対抗する為だ。

僕が指しているアイスのパッケージを、隣にいるぼくの幼馴染、

涼野風介はふむ、と声を漏らした。

「確かにそれは美味そうだ。

じゃあ、私はソーダにでもするか・・・

「風介！後で交換しようね！」

「ああ。

元々そのつもりで選んだのだからな。』

髪型といい、色といい。

全体的に涼しげな雰囲気の風介だけど、
やつぱり暑さには苦手らしい。

顔を見合させて笑い合ついたら、

「つて、何我が物顔でソレひつつかんで、
俺に差し出してくんのだよつ！？」

急に叫びだしたもう一人の幼馴染。

南雲晴矢。

びつじたかと思えば、いつの間にか手から無くなっていたアイスの
袋。

風介を見ると、

彼も同じらしく、不思議そうに眉を寄せていた（顔が怖いよ）

それで、

叫んでいた晴矢のほうを向けば、

「・・・あれ？

「何で晴矢が僕達の選んだアイス持つてるの?」

二二二

これはだら「そ、うか、お前か。覚悟は出来ているのだろ、う?」・・

人の世に聞かざる言葉

「あはははー! ざまあないね、晴矢。」

「てめつ！

持っていたアイスを僕に（無理矢理）渡して、

ヒロト……僕の幼馴染ね。基山ヒロトだよ。

・・・を、追掛け回し始めた

こんな炎天下の中、よく走り回れるよね。

僕が苦笑にも似た、感心の笑みを浮かべているのを見たリュウジ、

あつ、又僕の幼馴染。緑川リエウジでいうんだ。

・・・が、優しく頭を撫でてきてくれた。

「あいつら、まだ追いかけっこ終わらないみたいだから、

先に買つて」よう？」

優しく微笑んだリュウジに、僕は大きく頷く。

「うん！風介も行こー！」

「・・・そうだな。」

「善は急げって言ひでしょ？」

早くしないと、僕達の分まで溶けちゃうからね。」

三人でそつきめて、

店内へと入る。

・・・あつ。

「ヒロト！

僕達、一先ずアイス買つてくるね！」

手を大きく振りながら叫んだ僕に、

ヒロトはよろしくねーっと、手を振り替えしてくれた。

晴矢の、悪い頼むとも、聞こえた。

二人共、

なんだかんだで優しいもんね。

少し前を歩いていた風介が、ふいに僕へと振り向いた。

「財布、ちゃんと持つてるか？」

「うん。あるよ！」

リュウジ、リュックの中から取つて。」

「ん。了解。」

数十秒後に出てきた、熊の財布を見て、
風介が、偉い偉いと頭を撫でてくれた。

店員さんにアイスを渡して、お金を出して。

袋を受け取つて。

今日の僕は、とても手際が良かつた。

うんー絶好調！

風介とリュウジに頭を撫でてもうつて。

その後、手を繋いでくれた。

僕達が店内をると、

ヒロトと晴矢はもうかけっこを終わらせていた。

「じめんね、レイン。

晴矢のせいで・・・

「なつんで俺なんだよ!!

まあ。ありがとな、レイン」

謝つたり、お礼を言つてくれたりする一人に、

僕は笑顔のまま首を振つた。

「うん。

二人共元気だね。僕まで嬉しいや。」

えへへっと照れて笑うと、

可愛いなコノヤローって頭をグシャグシャつてされた。

ふふふつて笑つて、

リュウジの帰ろうかつて言葉で、

僕達は家に向かつて歩き出した。

その時、ふと時計を見たら、

12時半を指していた。

そりや、暑いはずだと納得する。

本当、病気になりそうな位強い日差しだよね。

汗が止まらない僕の額を、

ヒロトが苦笑しながら拭ってくれた。

「レインは暑さに弱いからね。」

「ありがと、ヒロト。」

「寒さにも、だけどな。」

「五月蠅いよ、晴矢。」

なんだとつーつて怒鳴ってきた晴矢を無視して、

風介とリュウジの後ろへささつと隠れた。

「晴矢、レインにこれから一切関わるな。

私が許さない。」

「ごめん晴矢。今回は俺も、

許せないかな。」

「お前等なあつ！！」

「ははははっ、ざまあないね、晴矢。」

「風介もリュウジもヒロトも格好いいぞ！」

僕の言葉に晴矢が反応し、

ヒロトを八つ当たりの如く追いかけ始めた。

又かよ・・・と吐息した二人と共に僕も苦笑した。

二人が走つて行つた方向は大通り。

車の行きかう道路。

僕達の歩いていた通りからは、横断歩道が見えた。

そつちに行つたら、遠回りになるよ。

そつちおつとして、二人の手を放そうとした時だった。

今まで蒼かつた信号機が、

赤へと変わつた。

「つ晴矢！－ヒロト！－！」

目いっぱい叫んだ時には、

もつ遅かった。

ドンッ とこゝかがぶつかる鈍い音

キキーッと甲高く泣き叫ぶブレーーキ音

ぎしゃあああと悲鳴を上げるスリップ音

目の前で見えたのは、トラックにぶち当たった二人。

僕の視界を支配したまつ赤な血しぶき。

僕の嗅覚を支配した一人の匂い。

二つが嫌に入り交ざつて、むせ返つた。

「 晴矢ああああ ! ! ! !

ヒロトオオオ ! ! ! !

さつきのブレーーキ音に負けないぐらい大きな悲鳴を上げた。

一人の手を振り払つて走り寄る。

道路にあるのは、まつ赤な何かを引きずつた跡。

この暑さのせいで、やらやらと蠢く嘘みたいな陽炎に、

嘘だつて呟いた。

そうしたら、

陽炎は

『嘘じやないせ』

って、僕を嗤つた。

晴矢

ΔΙΑΤΑΞΗ ΕΠΙΧΕΙΡΗΣΗΣ

うわああああああああああ！！！

—コレイン!

「落ち着いて、レイン！」

周りを行きかう車の轟々とした音でさえもかき消して、

僕は泣き叫んだ。

風介とリュウジの声が、

聞こえない。

倒れていた晴矢とヒロトが、

何故か満足そうに微笑んでいた。

*

*

*

「・・・」

ふと、田が覚めた。

五月蠅く鳴り響く田覚まし時計を消して、
むくりと立ち上がる。

立ち眩みがするくらいに蒸している部屋の中、

僕は何かに腕を引かれた。

「おはよー、レイン」

「おはよー、風介。」

重力に逆らわず、彼の腕の中に入る。

途端に、同じ石鹼を使っている筈なのに、自分とは違う匂いに包み込まれる。

「相変わらず、お前は小さいな。」

「風介が大きいんだよ。」

「私が大きいのではない。

レインが小さいだけだ。」

「なにおおおおおお……。」

「うわせえー やお前等……。」

「おはよ、晴矢。」

「おは、おは……。」

二つの間にか出てきた晴矢に挨拶をすれば、

一瞬で意氣消沈する彼。

「ははは、朝から騒がしいね。

おはよ、レイン、風介、晴矢。」

「おはよ、ヒロト。」

「おはよ。」

未だに抱きしめられたままだけど、

そのままヒロトに頭を撫でられる。

猫みたいにヒロトに頭を撫でる。

「あはっ、レインってば猫みたいだね。」

「おはよー、リコウジー。」

髪をまだ結んでいないコウジに類を撫でられた。

皆がいて、普通な、

何時もの朝なのに、

何故か異常に安心してこる自分がいた。

*

*

*

耳障りな程に五月蠅い蝉の声。

病気になるんじやないかってぐらい強い口差し。

リコウジの帰らひつて言葉で、

家へと歩き出す。

ふと時計を見れば、

12時半を指していた。

そこで、嫌な記憶がよみがえる。

胸の中から何かがせせり上がりてくる様な感覚に襲われる。

喪失感が僕を襲い、

切なく苦しくなる。

記憶通りに走り出そうとする一人に、

僕は待つてと声を掛けた。

「そつちは遠回りだよ、

今日はこっちを通つて帰る？・・・？」

風介とリュウジに手は繋がれていないけれど、

晴矢とヒロトを救う事で精一杯だった。

そんな時、

「おいつ・・・あれ！」

周りが何故か五月蠅い。

その人達が見上げている方を向いた。

そこには・・・

グラついて此方へ倒れてくる電柱があつた。

咄嗟に、何の本能か知らないけれど、

僕は弾け飛ぶ様に、

風介とリュウジのところへ跳躍していた。

驚いた顔をした一人だつたけど、

「リュウジ！..！」

「分かつてゐよ！」

「晴矢！ヒロト！」

「ふたつ、り、とも！..！」

僕を庇う様に立ち塞がつてゐる風介の叫びに近い声で、

リュウジが僕を押しのけた。

この中で誰よりも小さい僕は、

よろけるといつかはぶつ飛ばされる勢いで晴矢といヒロトの処へと、

突き飛ばされた。

一人に手を伸ばしても、

もうそこに一人はいなかつた。

重力に逆らわずに倒れた電柱は、

風介とリュウジに突き刺さった。

僕の聴覚を支配したのは、

周りにいた人達のかんざく様な悲鳴と、

何処からともなく聞こえてきた、

涼しげな風鈴の音。

「・・・ふ、すけ・・・

リュ、・・・ジ・・・」

泣き叫ぶ事もできず、

嗚咽しか出てこない。

「レイン! しかつりしろよ! 」

「頑張つてレイン! 」

「お願いだから僕達の言つ事を聞いて! 」

「嘘・・・だ・・・」

無意識に呟いていた言葉に、

又応える

『嘘じやねえぜ』

僕を嗤う陽炎。

もう死体と化している風介とリュウジは、

あの時の同じ、

何か満足そうに微笑んでいた。

*

*

*

僕はきっと、

気が付いていた。

この、

何時までも輪廻する事の意味を。

僕は知っていた、

夢なんかじや、

嘘なんかじやないって。

皆も気が付いていたんでしょう？

きっと、

結末は一つだけだ。

*

*

*

僕は走つていつた晴矢とヒロトの背中を追いかけるように走り出した。

袋に入ったアイスが地面に落下した。

そんなの、気にならない。

僕を制止する風介とリュウジに笑いかけた。

「大丈夫だよ。」

にっこりと微笑むと、

手を振つた。

今、正に赤に変わろうとしている信号機。

僕は何の躊躇も無く飛び込んだ。

ふと見えた時計は、

12時半を指していた。

僕は一人をドンッと押しのけた。

次の瞬間、

僕はトラックにぶち当たった。

視界がまっ赤に染まり、

飛び散った血しぶきが、

絶望を移した四人の瞳に乱反射した。

だんだんと遠のいていく意識の中で、

不満そうな陽炎に僕はにやりと嗤つた。

「やまあみる」

悔しそうに顔を歪ませた陽炎に、

軋む体に最後の力とばかりに意識を集中させて、

四人へと手を振った。

君の負け。

僕の勝ち。

僕だつて、

陽炎だよ？

*

*

*

ベッドの上で、

四人の少年は悔しそうに呟いた。

又、失敗した。

そこに、

僕はいなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6135z/>

カゲロウデイズ

2011年12月20日17時53分発行